

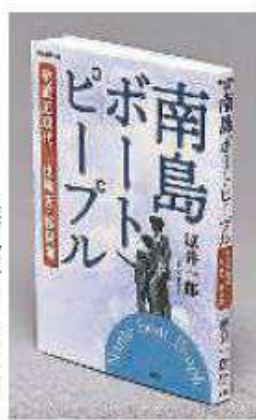
南島ボートピープル

原井 一 郎 著

私は沖縄や奄美の住民の優しさに惹かれる。歴史の厳しき、その中で培われた人のつながり、思いやり、独特の人情がある。

奄美は近世に琉球から切り離されて薩摩藩の支配下に置かれ、砂糖で搾取され、ソテツ地獄の世界となった。太平洋戦争末期の沖縄の悲惨さは筆舌に尽くしがたいが、奄美も本土の防禦線として位置づけられた。島尾敏雄『出発は遂に訪れず』では特攻隊長として死を予定された者の葛藤が描かれているが、戦争の悲惨さはこの地も覆った。

本書は私に大きな衝撃を与えた。著者のジャーナリストらしい執拗なまでの探求。そこからあふり出される奄美の貧困、境遇から脱出しようとする動き、島外に出ねばならない社会環境、働く先でのいわれなき差別、奄美から島外に出た人々が置かれた厳しい実態が、文字を通して地の底のうめきのように浮かび上がってくる。



海風社・2640円

奄美の苦難の一端接して

長野県からも満州移民をはじめとして、国内外への多くの移住者があった。江戸時代に収穫を終えた信州の農民は、雪に埋もれる冬の間江戸に出て春まで働いた。彼らは寒くなると群れを成して里に下りる椋鳥になぞらえられ、「ムクドリ」と呼ばれた。江戸の町は低賃金の彼らが必要とし、「ムクドリ」たちも生活を成り立たせるため季節作業員にならざるを得なかった。彼らは江戸の人たちから、「初雪やこれから江戸へ食いでる」「人並みに食えば信濃は安いもの」などと評された。長野県から満州に出ていった人たちも、山村などの生活の厳しいところに住んでいた。貧しいからこそ郷里から出ていかざるを得なかった。

本書を手にとって、近・現代を支えた奄美人たちの苦難の一端にぜひ接してほしい。沖縄を旅すると首里・那覇を中心とする世界でも島差別を感じる。同時に長野県には部落差別もあった。外国人労働者への差別を含めて、私たちの周囲には今も多くの差別が存在している。まずは差別を自覚しなければならぬ。差別のない世界を築いていく糧として、本書は大きな意味を持つ。(笹本正治・長野県立歴史館特別館長)

はらい・いちろう 1949年生まれ。南海日日、大島新聞記者・編集長。雑誌Lapizライター。奄美市名瀬在住。